

第一章　　10分前に、ω時の、朝の、町は、
ウエルズの、沈潜していた、活気なく、暑
気とよどみで。　　大部分は、その11、
000人の人々の、寝返りをうっていた、

いらいらしながら、少数の人は、少しも眠りにつけない、呪った、事実を、わずかの微風さえないことの、取り除いてくれる、息苦しくさせる効力を、夜の。熱気が、

カロライナ特有の、八月の、満たしていた、
重苦しく、空間を。 月は無かった。
街灯のいくつかの裸電球が、 商業地区の、
映しだしていた、 黒い影を、 戸をおろした

店や、ようやく生き残っている映画館、人
けのないガソリン・スタンドに。 街角
にある、町を通り抜けているハイウェイと
交わっている、直角に、自動空調機が、サ

イモン薬局の、動いていた、
間断なく、静
けさをふるわせて、夜の。
通りの向こ
う側に、一台のパトロール・カーが、
ウエ
ルズ町警察署がパトロールをさせている、

夜間の、停車していた、縁石に沿って。
サム・ウツドは、その運転手の、にぎつて、
ボール・ペンを、しっかり、頑丈な指で、
記入していた、報告書に。 彼は、乗せ

かけていた、署のクリップボードを、ハン
ドルに、そして、記入していた、几帳面な
活字体で、わずかな明かりをたよりに、窓
からの、車の。 慎重に書き入れた、彼

は異常なく終了したこと、もれなく巡察したこと、主だった住宅地域を、町の、指示されている通りに、そして、彼自身が確認した、まったく異状がなかったと。 彼

は誇らしく思った、書き留めることに、自分の判断を。それは彼に再び意識させた、過去三年間そうであつたように、まさにこの時間に、夜の、彼が目覚めていて任

務を果たしている主要な人物である、町
じゅうで。 終えて、記入を、彼は置いた、
クリップボードを、シートに、横の、見た、
再び、時計を。 三時になるところだっ

た、時間である、小休止してコーヒーを飲む時間である、ドライブ・インで。　だが、夜のこの暑さは、彼に、拒絶させた、コーヒーを飲むのを。　何か冷たいものがい

い。 休憩をとるのがいいか、いま、それとも、通り抜けるのがいいか、先に、貧民街を、町の貧民地域の？ それは最もきらいなことであつた、彼の仕事で、かれが

はつきりと嫌うことだ。

しかし、やら

ないわけにはいかない。

思い返して、

再び、重要性に、彼の任務の。

彼は決

めた、休憩を遅らせることに。

彼は動

かした、車を、進めた、舗道へりから、プ
口の滑らかさで、優れたドライバ―の。
彼は横切った、ハイウェイを、車が走って
いない、両方向を見ても。ガタガタと

音を立てて入った、デコボコの舗装路に、
広がっているニグロ地域の。彼は運転
した、ゆっくり、思い出して、再び、夜の
ことを、何か月か前の、時を、彼が轢いて

しまった、犬を。 犬は眠っていたのだ、

道のまん中に、サムは気付かなかった、それ
れに、間に合うようには、避けて、犬を、
完全に。 サムは思い出していた、自分

のことを、再び、しゃがみこみ、車道に、持ち上げて、犬の頭を、見入っている、その思いがけないひどい痛み、他人を当てにしている許しを求める目で。　そして、

彼は見た，死が訪れるのを。

彼は屡々

出掛けただけれども，狩猟に、一般には、見
られていたが，気丈な男と、サムは悔恨に
さいなまれていた，その犬にたいし、悔

しさを抱いた、彼がもたらした、その死を。

サムは目を道路に向け、避け続けた、最悪の事故を、穴によって起こる、目を配つた、犬に。

短い環状道路を、黒人街

を
通
っ
て
い
る、
と
お
り
終
わ
る
と、
サ
ム
は、
ブ
レ
ー
キ
を
か
け
な
が
ら、
車
に、
で
こ
ぼ
こ
の
踏
み
切
り
を
渡
り、
上
り
道
に
か
か
つ
た、
ゆ
っ
く
り
と、
守
ら
れ
て
い
る、
両
側
に、
古
い
見
苦

しい、ほとんどペンキのあとも見えない羽
目板張りの家屋で。　これが、貧しい白
人たちの地域である、区域である、人たち
の住む、金を持っていない、金が入る見込

ポワチエの強く正しい英語会

月とウサギの餅つき会

みがない、あるいは、単に、金について悩まない。サムは縫うように進めた、車を、その道を、集中して、見逃さないように、穴を、道路にある。そして、彼は

目を上げた、見た、半ブロックほど先に、
彼の、黄色いゆがんでいる長方形の光の窓
枠が見えた、パーティ家である。　光が
あるのは、この時間に、意味しているかも

しれない腹痛の人がいることを、あるいは、意味しているかもしれない、ほかの何かのことを、サムは、嫌いであつた、その種の人を、のぞき込むような、人の家の窓

を、夜に、しかし、警察の警官であれば、
職務中の、それは事情がちがう。彼は、
静かに寄せた、車を、歩道の縁石に、混乱
させないように、誰かを、不必要に、静か

に車を寄せた、調べるために、注意深く、なぜ明かりがついているのか、パーティー家の台所で、ω時15分すぎに、朝の、しかし、彼自身は分かっていた、理由を知って

いることが。 その台所は、照らされて
いた、一個の100ワットのはだか電球で、
下がっている、コードで、まん中から、そ
の天井の。 薄い、くたびれたレースの

カーテンが張ってあったが、グツタリと、
くたびれた感じで、あけ放たれた窓に、見
えないようになってはいなかった、中のも
のを、明るい台所の。 そこには、はっ

きりと見えた、彼女が背中を向けて、デロ
レス・パーティーだった。二度見かけた
のだ、このことがあった、過去2・3週間に、
彼女は着ていなかった、ナイトガウンを、

まさに、パトロールカーが達したときに、
箇所、窓の外の、デロレスは取り上げ
た、小さな鍋を、ストーブから、こちらを
向いた、そそいだ、鍋の中身を、ティー・

カップに。 サムは、全部を見た、彼女の
のーの歳の両胸と好ましい曲線を、彼女の
若さに満ちた大腿部の。 何かが、デロ
レスの、しかし、不快な感じを抱かせた、

彼に。　そして、見てさえ、彼女の裸の
からだを、なにも興味を抱かせないと思っ
た。　その理由は、彼は想像した、彼女
がいつも貧しくて裸を洗っていない、ある

いは、そう思わせるからだ。 見たとき

に、サムは彼女がカップを口元へ運ぶのを、彼にはわかった、誰も病気ではないと、だから、反らせた、彼の目を。 一瞬、

彼は考えた、警告しよう、彼女に、彼女が表から丸見えであると、しかし、決めた、そうしないことを、というのは、ドアをノックすることが、この時間に、起こし

てしまうかもしれないと、家中の子供たち
を。 それに、ほかにも考えられること
は、彼女は応答できそうにもないことだっ
た、ドアのノックに、衣服を着けないまま

では。 サムは、まがった、つぎの角を、
向かった、ハイウェイの方へ。 何もな
かったけれど、目に見える車の動きは、サ
ムは完全に停車した、交差点で、そして向

かった、北へ。彼は車の速度を上げた、熱い空気でも感じられるように、明けた窓から入ってくる、作り出すように、幻想を、涼風のような。そして、ω分間、

彼は維持した、その速さを、所まで、市の境界線が見えてくる。彼は車のアクセルから足を放し、越えて、境界線を、入れた、車を、楽に、駐車場に、一晩中営業し

ているドライブ・インの。彼は車から降りた、身軽に、一人の男としては、身体のサイズが大きい、そして彼は押し込んでいった、そのレストランに。レストラ

ンは暑かった、中は、外より。中央
に、部屋の、あった、U字型のカウンター
が、カバーされている、フォームイカ（商
標、テーブルなどの表面に塗る合成樹脂塗

料)で。片側には、一列に合板で囲まれたブース(仕切られた席)があり、居心地が悪そうだったし、私的な自由を持ってそうにない感じだった。窓の一つで、お

よそ役に立ちそうもないエアコン機が一台
ついていて、打ち出していた、わずかな流
れを、冷たい空気の、消えてしまった、感
じられなくなつて、数インチほどで、噴気

孔から、冷気が出てくる。木の板ばり

の壁は、かつて塗られていただろうが、白い色で、過去に、そのペンキは黄色になっていた、年月のあいだに。調理器の

上の壁などが、まっ黒な汚れで、油の蒸気
の、現れていた、長年の記念物となつて、
何千人かの小さな注文の、調理され食べら
れ忘れ去られた。　　夜のカウンター担当

の男は、痩せた十九歳の若者であつた、彼のとても長い両腕は、はみ出していた、袖口の下に、うす汚れたシャツの、まるで両腕が引き伸ばされたように、なにかの我慢な

らない機械にかけられたような。 細

長い骨張った顔には、まだ、有った、にき
びのあとが、下唇がいつもわずかに垂れ下
がっていた。 しじゅう唇をつきだし、

人に向かつて、身ぶりであり、反抗の、知らないようだった、決めかたを、自分の意思の。時に、サムが入って行った、男はV字型に折れ曲がって、カウンターと交

差して、乗せていた、からだ全体を、両肘に、引き込まれているようだった、完全に、荒々しい漫画本に、開いて見ている、彼の前に。　　現われたので、警官が、彼は素

早く入れた、読んでいた物をカウンターの
下に、ぴんと伸ばした、狭い両肩を、備え
た、何十分かの時間に応ずる、彼が過ご
す、警備する警察官と、この眠っている街

を。
彼は、手を伸ばした、厚手のコー
ヒーマグに、サムが座ると、一つに、三つ
の辛うじて使われているカウンターの前の
腰掛けの、布で被われている椅子が無傷

のままの状態で。 「コーヒーはいらない、ラルフ、今日は暑すぎる」 サムが言った。 「呉れ、コーラの大きいのを、代わりに」 彼は脱いだ、制帽を、ぬぐった、

右腕で、ひたいのあたりを。

夜勤の若

者は、すくい入れた、傷だらけのグラスに、
半分ほど、かき氷を、瓶の栓を抜き、満た
した、グラスに、コーラと泡を。 コー

ラの泡が落ち着くと、サムは飲み干し、噛み砕いた、氷のかけらを、そして男にたずねた。「どっちが勝ったんだ、今晚のボクシングは？」 「リッチだ」 カウ

ンターの若者が答えた、すぐに。「判定が割れたけど、とっいたらしいよ、挑戦権は」サムは自分で一杯にした、グラスを、飲み干した、再び、彼が意見を言う前

に。 「良かったよ、リッチが勝って、あまり好きじゃないが、イタリア人は、しかし、少なくとも白人が挑戦権をとったんだからな」 カウンターの男はうなずい

た、賛同して。 「六階級は黒人のチャ
ンピオンだ、今はね、上の方の。 分か
らないね、奴らはどうしてあんなに強い
のか」 彼は、押し当てて、両手をカウ

ターに、ひろげた、骨ばった指を、無駄な
試みをした、それが見えるように、強くて
力のあるように。　彼は、見ながら、警
官の頑丈な手を、考えた、彼自身の手もあ

のようになるだろうか。　　サムは、自分で、ケーキを取った、一つだけ残っていた、傾いて、曇っているプラスチックの入れ物に、カウンターの上の。　　「奴らは、

感じないんだ、なぐられた時に、お前やお
れのようには」彼は説明した。 「俺た
ちとは、違うんだ、神経系統が。 奴ら
は、動物と同じなんだよ。 ぶん殴るし

かないんだ、斧で、奴らをノックアウトするには。本当に。実際のところ、奴らは勝ってきたし、怖くないんだよ、リングに上がるのが」ラルフは、しきりに

うなずいていた。目が告げていた、サムが宣言していると、締めという言葉を、このテーマについて。彼は直した、ケーキの入れ物のふたを。「マントリが町に

来ていた、今晚。連れて来た、娘も。
たいへんな美人だと、話じゃ」「思つて
いた、彼は来ないだろうと、来月にならな
ければ」 若者は体をのりだした、カウ

ンターをふきながら、使い切ったびしよびしよのぼろ切れで。「金がかかるようだ、予定していたよりも、完成するには、音楽堂を。それで、想像しているよう

だ、主催者が返済するには、助成金を、期限内に、彼らは上げなければならぬ、入場料を。 マントリは、料金をいくらまで上げられるか、相談にのるために来たつ

てことだぜ」 サムはコークの残りをコツ
プにあけた。 「どういふことになるか
な」 彼は言った。 「万事うまくいく
かもしれんし、大失敗に終わるかもしれ

ん。
おれはクラシック音楽のことはな
んにも知らんが、マントリが指揮をすると
いうだけのことで大勢の人間がここへやっ
て来るとは思えんな。
交響楽団だとか、

そんなことはわかっているが、そんな音楽の好きな連中は、なにもこんな所へ来て固い椅子に坐らなくたって、一冬じゅう同じ音楽が聞けるんだ。雨でも降ったらど

うするんだ」 コップを飲み干すと時計に
目をやった。「まっただ。 どう
なるんだか。 おれも音楽はあんまり好
きじゃないし、 そんな高級なのは縁がねえ

が」ラルフが同調した。「でも、連中
が言うように、それがうまくいってこの町
が有名になって、観光客が来て金を落とし
ていくようなことになりや、ここだって修

理してくるだろうし、みんなの生活も少しはよくなるかもしれないな」サムが立ち上がった。「いくらだ？」「十五セント。ケーキはおまけだ、残りもんだ

から。 お休み、 ミスタ・ウッド」 サ
ムは二十五セントおいて外に出た。 以
前に、カウンターの男が生意気にも言っ
た、彼を、サムと。 サムが与えたのだっ

た、冷たい睨みつけを、不承知の、それは
役立ったのだった。「ミスタ・ウッド」
となったのだ、それである、サムが望んで
いたことだ。彼は車にもどり、短く無

線で署に連絡した、町に向かう前に、ハイ
ウエイを、無線で署に連絡をしておいた。
彼は、納まった、座席に、気持ちになつ
た、向かう、単調な仕事に、それはなる筈

の、最後の部分に、この夜の。　　外気は
熱く澱んでいた、変わりなく、車のスピー
ドを上げていたが。　　初めてだった、彼
が勤務についてから、サムは呪う気持ちに

なった、押しつぶされる暑さに、告げてい
る、焼けつくような熱さの日を、あとも
続く。それは意味している、もう一つ
の熱い夜だ、明日も、多分に、暑い夜がく

る、更にその後。 サムは、速度を下

げた、車の、町の中心街が見えてきたので。

この夜もいつものように人影はなく、しかしサムは運転した、ゆっくり、小さな中心

街では、習慣になっ
ていて。 彼は思っ

た、再び、デロレス・
パーティーのことを。

彼女は結婚するだ
らう、年若いうちに、
彼は確信した、ど
こかの男がたくさん
の楽し

いことを、セックスして楽しむだろう、彼女と。その時、一ブロック先に、彼は見た、何かが横たわっているのを、路上に。サムはアクセルを踏んだ、車はスパートし

た。光の中で、四個のヘッドライトの、
目標物がだんだん大きく見えてきた、サム
はブレーキを踏んで車を停めた、まん中
に、道の、数フィート手前で、今は人間と

分かる、手足を伸ばした姿勢で横たわっている、舗道に。彼は点け、赤い警告灯を、急いで降りた、車から。彼は、かがみこむ前に、その男を調べに、彼はまず警戒

の目を配った、男の周辺に、手をかけた、腰の拳銃に、とつさに行動できるように。何も見えなかった、静かに佇んでいる建物と、しつかりした舗道のほかには、両方向

に伸びている。心配はない考え、当面は、サムは片膝をついた、男のそばに、道路上の。男は横たわっていた、腹這いで、両腕を頭上に伸ばし、脚をひらいてい

た。顔が向いていた、左に、だから、右の頬を押し付けていた、すりへったコンクリートに。頭髪が異常に長く、それが覆っていた、首の後ろを、そして、カー

ルしていた、触れるあたりで、襟に、上衣の。彼の脇に、五・六フィート離れたところ、銀の握りのついたステッキが、転がっていた、妙に頼りなげに、道路上に。

サムは差し込んだ、左手を、下に、倒れて
いる男の体の、感じるか試した、心臓の鼓
動を。　うだるような暑さにもかかわら
ず、男は着ていた、チヨツキを、キチツと

ボタンをにかけて。 チヨツキを通して、
サムは感じた、証拠はないと、男が生きて
いるという。 その時、彼は思い出した、
読んでいたことを、一見死体と見える人体

について。 サムは、受けていた訳では
なかった、何か特別なコースを、訓練の、
この仕事のために。 彼は要するに、採
用され名前が載り、給与支払い表に、説明

を受けた、まる一日、新しい任務について、
そのまま仕事についた。しかし、指示
されたように、彼は読んだ、市・郡・州の
法規集を、読んでいた、2・3冊の教本を、

利用可能な、小さな署の本部の建物にあつた。サムは記憶は良かった、知識は、彼が吸収した、思い出された、彼に、今も、必要な時に。

想定してはならない、一人の人間が死んで
いると、医師によつて宣告されるまでは。
その人は失神しているかも、気絶している
かも、あるいは意識不明に陥っているのか

もしれない、ほかの幾つかの理由によつて。
人が、インシュリン・ショックを受けた、
間違えられた例はよく有る、死人と、ある
例では、息をふきかえした例もある、持ち

込まれたあとに、死体収容所に。 場合

でなければ、人体が非常な損傷を受けている、生存が不可能である、たとえば首がないというような、常に想定すべきである、

人は生きている、腐敗が生じている、度合
いまで、生命が存在しえない。

サムは急いで、戻った、車に、取り上げた、
無線電話のマイクロフォンを。 この時

間では、拘らなかつた、使うことに、公式な用語を、話した、迅速に、明確に、すぐに、彼の呼びかけが返答されると。「交わる角で、パイニイ通りとハイウェイの、お

およそで言ってます、男が道路に倒れており、考えられる、死んでいると考えられる。状態ではなく、誰かが近辺にいる、通行もなかった、ここ数分間に。派遣してく

れ、医師と救急車を、直ちに」 言い終わってから、サムは思案した、しばらくの間、使っていたただろうかと、適切な言葉を、この報告で。 これは新しい経験だった、

彼の、そして、彼は望んでいた、取り扱ったことを、適切に。　　すぐに、声が、夜勤交換手の、彼を、我に帰した。「その場で待機しておれ。　　識別できるもの

はあるか、被害者を？」サムは頭を働かせた、急いで。「いや、まだない」彼は答えた。「私は見たことがない、この男を、私の知っている限りで。しか

し、思っている、知っていると、誰だかを。

彼は髪の毛が長く、チヨツキを着ていて、ステツキを持っている。

小柄で、身長

五フイート五インチ程度だ」 「そりゃ、マ

ントリだ」交換手が叫んだ。 「指揮者

だ。 中心人物だ、こんどの音楽祭の。

万一それが彼で、死んでいるとすると、たいへんなことになるぞ。 くり返す、そ

の場で待機せよ」サムは戻した、マイクを受け台に、行った、急ぎ足で、戻って、倒れている男のところへ。 わずか九ブ
ロツクの距離しかないので、病院までは、

救急車が来るだろう、五分もたたないうちに。
時に、サムはかがみ込んだ、男の上
に、もう一度、彼は思い出した、轢いて
しまった犬のことを、しかし、これは限り

なく重大なことだ。 サムは伸ばした、
手を、乗せた、たいへん穏やかに、後頭部
に、男の頭の、まるで彼が触ることで、確
かめ伝えることが出来ると、救助がすぐ来

ると、だからこの男は少し横になっ
ていれ
ばいい、荒い舗装の上に、あと
2・ω分間
だけ、その間は、彼は一人では
ないのだと。
そのような考えを思っている
ときに、彼の

気持ちで、サムは気が付いた、何かが、べつたりしネバネバした、しみ出ている、彼の指のあいだに。　速い無意識の動作で、彼は手をひっこめた。　哀れみの気持ち

が、今まで感じていた、徐々になくなり、
烈しい怒りの気持ちが燃え上がってきた、
代わりに。

ポワチエの強く正しい英語会

月とウサギの餅つき会